

親の「まごころ」がわからない

教師と親の思いのズレを活かす処方

静岡大学教授 馬居政幸 うまい まさゆき

教師と親 もともとの立場が違う

「最近の母親は昼間、家にいないので困りますね？」

私が静岡大学に赴任した年、教育実習の研究授業で訪問した学校で、女性の指導教員から聞かされた言葉である。私は返答できず戸惑った。自分も母親なのに、母親が仕事をもつことを非難することに違和感をもったからである。一九七九年六月のことであった。

それから三〇年、さすがに母親が働くことを非難する教師は少ないと思うが、学校の期待に反する行動や言動を選択する親は生まれ続けている。それを象徴するのが本誌のテーマであろう。ただし、「教師と親の思いのズレ」は再生産されるが、両者の関係は変化した。三〇年前の教師にとってズレの解消は親の責任であり、学校の基準から外れる親を批判することは、初対面の新米大学教師に愚痴るほど当然のことであった。だが、いま学校現場で「親のところがわからない」と悩む教師にとって、ズレは親を理解することで解消すべき教師の課題になる。

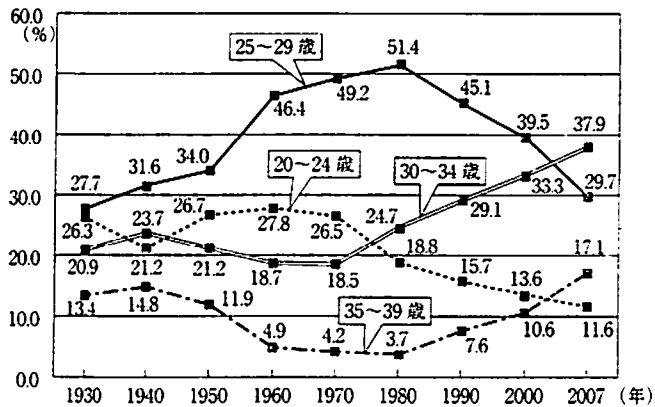
本来、教師と親は立場が異なる。親にとって自分の子どもが第一だが、教師はクラスの子どもたちを平等に教えることが職業倫理である。親は子どもとの関係が一生続くことを前提に判断するが、教師に与えられる時間は通常一年である。このように立場が異なる以上、教師と親の間にズレが生じることを避けられない。それなのになぜ、教師は親のところがわからないと悩まなければならず、その解決の責任を取らなければならないのか。問題は理不尽なクレームや非常識なモンスターが存在自体ではない。このような教師を被害者ともみなせるラベリングによって親の要望に応える悩みが語られる理由（社会的背景）を説明し、教師と親の関係の変化の意味と対処方法を提示することである。その答えを親とりわけ母親の変化を追うことから求めたい。

学歴と年齢の高さが目線を高くする

図1を見てほしい。出生率の推移を五歳単位に示したものだが、私が新米教師であった一九八〇年に生まれた子どもの母親の五一・四％は二五～二九歳であった。二〇～二四歳を合わせれば、一九六〇年代からこの時期まで出産する女性の七割以上が二〇代である。経済の高度成長とともに、専業主婦の母親がサラリーマンの夫を支え二人の子どもを学校中心に育てる日本版近代家族が定着したことを示すグラフである。母親の不在を女性教師に批判させる社会的背景でもある。

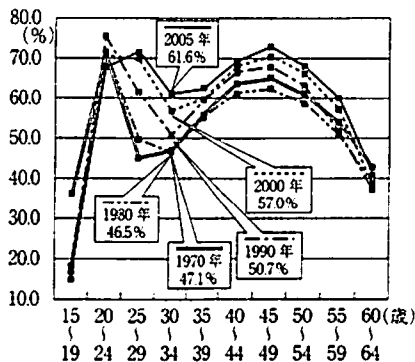
だがこの時期をピークに二〇代で出産する女性の割合は減少に転じ、二〇〇七年は三〇～三四歳が三七・九％で最も多い。三五～三九歳一七・一％と合わせて三〇代の女性が五五％と半数を超える。

母親の年齢が上がっただけではない。女性三五～四四歳の教育程度の推移（図2）を見ると、一九



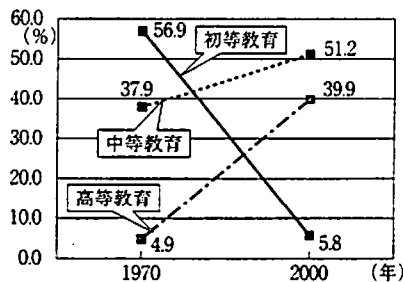
厚生労働省統計情報部「人口動態統計」による。

図1 女性の年齢（5歳階級）別出生数の割合：1930～2007年
 (国立社会保障・人口問題研究所 <http://www.ipss.go.jp/> 人口統計資料 (2009) より作成)



総務省統計局「国勢調査報告」による。

図3 女性の年齢（5歳階級）別労働力率の推移：1970～2005年
 (国立社会保障・人口問題研究所 <http://www.ipss.go.jp/> 人口統計資料 (2009) より作成)



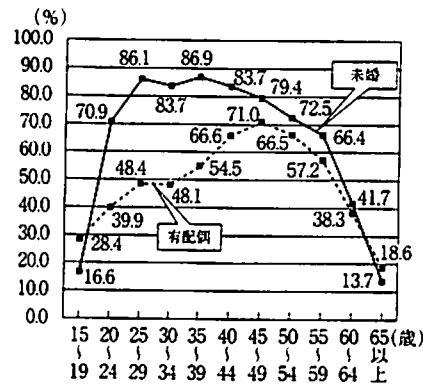
総務省統計局「国勢調査報告」による。初等教育は小学校・中学校・高小(旧青年学校を含む)を、中等教育は高校・旧中を、高等教育は短大・高専・大学・大学院をそれぞれ卒業した者。

図2 女性 35～44歳 教育程度別人口割合推移
 (国立社会保障・人口問題研究所 <http://www.ipss.go.jp/> 人口統計資料 (2009) より作成)

七〇年は初等教育五六・九%、中等教育三七・九%、高等教育四・九%であったのが、三〇年後の二〇〇〇年は初等教育五・八%、中等教育五一・二%、高等教育三九・九%に変化した。三五～四四歳とは二〇代に産んだ子どもが小中学校に学ぶ時期。一九七〇年は大阪万博が開催され高度経済成長を世界に誇った時代だが、この時期の小中学生の母親の多数派は戦前生まれの初等教育卒であった。五%弱に入る大卒の教師の判断に従うことへの抵抗感は少なかったであろう。だが三〇年後の三五～四四歳女性の四割は高等教育卒。加えて、三〇代で産んだ子どもが中学校を卒業するときに、親は四〇代後半から五〇歳を超え、教師なら管理職の年代であり、気力と力量が最も充実する三〇代教師も年下。わが子の成長を願う親の言葉の強さが担任にクレームとして受け止められる社会的背景である。

職業経験は豊富だが子育ての経験知と技能は未成熟

親の言葉に力を与える変化がもうひとつある。女性の労働力率の上昇である。一九七〇年から一〇年ごとに女性の年代別労働力率と三〇～三四歳の数値を示した図3を見てほしい。七〇年代に成立したM字型就労構造を特徴づける結婚・出産・育児を理由にした女性三〇代離職者の割合が、八〇年を境に減少に転じていることが読み取れる。また図4は九〇年代に共働き世帯が無業の妻(専業主婦)の世帯を上回ったことを示す。その結果、二〇〇五年の女性配偶関係別労働力率(図5)を見ると、未婚者の有職者は三〇代も八割以上、有配偶者も三〇代の半数が働く。しかも就学前児がいる女性が仕事をやめた理由(図6)では、「解雇・退職勧奨」を含めると三割が仕事継続を求めている。三〇～三四歳女性の三二%が未婚(表1)であることを考慮すれば、現在の三〇代女性にとって、結婚、



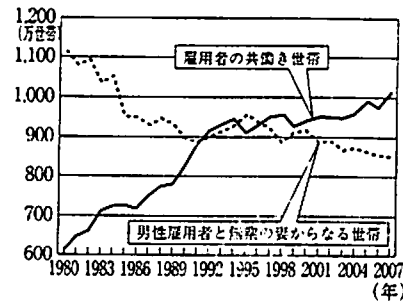
総務省統計局「国勢調査報告」による。

図5 女性の配偶関係別労働力率：2005
(国立社会保険・人口問題研究所 <http://www.ipss.go.jp/> 人口統計資料(2009)より作成)

	男性	女性
20~24(歳)	93.6 (%)	89.4 (%)
25~29	72.6	59.9
30~34	47.7	32.6
35~39	30.9	18.6

総務省統計局「国勢調査報告」による。

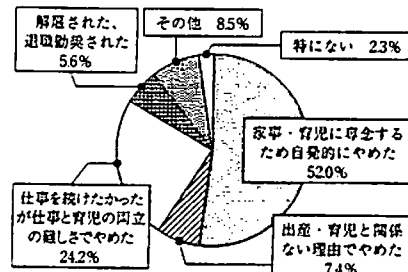
表1 男女年齢別未婚率：2005



1980年～2001年は総務省「労働力調査特別調査」2002年以降は「労働力調査(詳細集計)」(年平均)による。

図4 共働き等世帯の推移

(内閣府 少子化対策 <http://www8.cao.go.jp/shoushi/index.html> 平成20年版少子化白書より)



日本労働研究機構「育児や介護と仕事の両立に関する調査」(平成15年)による。

図6 「出産1年前には雇用者で現在は無職」で就学前の子供がいる女性が仕事をやめた理由

(内閣府 少子化対策 <http://www8.cao.go.jp/shoushi/index.html> 平成20年版少子化白書より)

出産、育児は人生の選択肢の一つだがゴールではなく、優先度も仕事より上位にあるわけではない。離職の有無にかかわらず、三〇代まで仕事をして母親になった女性であれば、わが子の担任を教える師である前に報酬で働く職業人とみなすのではないか。まして公立学校の教師は公務員である以上、雇用者は納税者である自分であり、民間の職場で成果を問われる判断基準で、わが子の学力低下を教師のサービス不足とみなすこともありえよう。ただし、それは学校と教師へのクレームの正しさを保障するわけではない。仕事上の経験の豊富さと親の力量の高さの尺度は異なる。父親になれない男性と同様に、女性が母親になる時間と仕事の時間はトレードオフの関係になる。高学歴ということは、学校の勉強中心に育った子育て経験に乏しい男女である可能性が高い。問題の根はより深い。

図7を見てほしい。一八歳以下の子どもがいる世帯は現在三〇代半ばの男女が生まれた一九七五年では五割をこえていた。だがこの男女が家族をつくる側になった二〇〇〇年前後に三割をきる。当然、六歳から一五歳の小中学生のいる世帯のみの割合はさらに減少する。この変化を団塊の世代と比較できるようにモデル図にしたのが図8である。団塊の世代から団塊ジュニアへの変化は一人の女性が産む子ども(合計特殊出生率)を減らしたためだが、子ども二人が定着した後に生まれ育った少産世代+団塊ジュニアの子どもの減少は晩婚化+非婚化による未婚者の増加(出産女性の減少)が原因。その結果、高齢者や独身男女の単身世帯の増加により、親も子も身近に育ちあう仲間とモデルを失った。育児不安と子育て支援が行政サービスの課題になり、家庭内暴力や児童虐待を防止する法律が制定され、認可・認証保育園の増設や認定子ども園の創設が論議される背景である。

ただし、いずれも就学前とその親が対象。小学校教育後は学童保育や放課後児童クラブを除けば、親への学校支援の要請はあっても、乳幼児期のように子どもの成長にあわせた支援策を見いだせない

子どものいる世帯は4つに1つに、家庭の中の子ども数は変わらない

	□1人	□2人	□3人以上	□児童のいない世帯
1975年	20.0	24.6	34.4	47.0
1985年	16.6	22.6	35.7	53.3
1990年	14.4	17.8	36.4	61.3
1998年	12.6	12.8	39.5	69.8
1999年	12.4	12.6	41.4	70.7
2000年	12.0	12.3	41.4	71.3
2001年	12.2	12.2	41.3	71.2
2002年	11.8	11.9	41.1	72.2

図7 児童有（児童数）無別にみた世帯数の構成割合の年次推移
（厚生労働省「平成14年 国民生活基礎調査の概況」http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/20-19.html より作成）

トラブルの原因を活用する処方方の創造を

い。小学校入学と同時に親は学校が期待するモデルに变身し、学校の必要に応じて応じることが当然視される。親の生きる場の条件が好転するわけでもなく、逆に労働力率の上昇によって子どもにかかわる時間と意欲の減少が進行する可能性が高いにもかかわらず、孤立状況が変わらないまま社会での経験と年齢を重ねられれば、学校の常識からのズレを自己本位な基準で修正することを求める親の増加を避け得ない。修正要求は他の親にも向けられ、その調整に翻弄される教師も増えるであろう。親とのズレを悩む誠実な教師と正義感や使命感にあふれたモンスターが誕生する社会的条件の成立である。親とのズレどうすればよいか。教師と親双方で用いてほしい処方箋を三占指摘しておきたい。

処方箋1は、教師と親が立場の違いを前提に、子どもにとっての学校の必要性を再定義すること。トラブルは相互理解のズレから生じる。教師と親はもともと立場が異なり、かつてのように教師の都合に親が従う社会的条件も失われた。それどころか親同士の立場の相違の調整も教師の責任になる可能性があるとすれば、違いを認め合うことから始めるしかない。実はこの原則こそ、現在の子どもたちが必要とする学校の再定義のための最重要コンセプトになる。同一地域に居住することのみを理由に集まった多様な人（個性）が、生きる場を共有することで生じるトラブルを処理する能力（人の間づくり）の獲得こそ、子どもたちに最も必要な学習課題であり、その役割を担える場は、学区制に支えられた公立の小中学校しかない。多様な子どもたちが切磋琢磨して共に生きることが出来る場を構築できるのは公立学校だけである。限られた家族のみの家庭、身近に育ち学び合う友を失った地域、

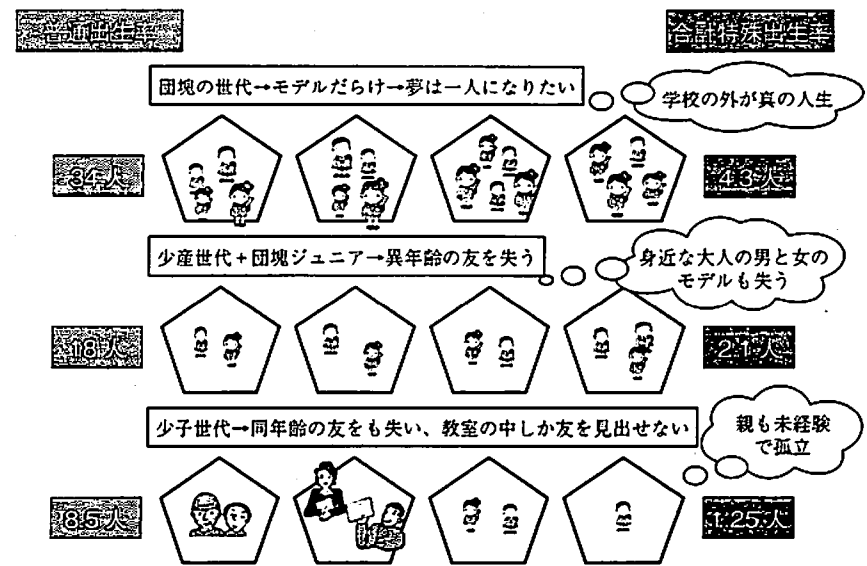


図8 出生率低下に伴う家族構成の変化モデル

特定の知識・技能の教授を目的にする学習塾では準備できない学びと育ちの条件である。

処方箋2は、わが子ではなく他人の子を育てることの大切さのコンセンサスづくり。

かつて幼稚園の運動会で自分の子どもを主役として写すビデオカメラのコマーシャルがあった。実際に自分の子しか見ない親がいるのも事実。だが自分の子しか見えない親こそ、わが子の成長を阻む元凶であることを教えるのが教師の役割。親が育てられない子どもは多様な面(隠れた才能)を育ててくれるのが先生とクラスの友だち。わが子を心豊かに成長させる鍵は、友だち関係を含むわが子を取り巻く「ひと、もの、こと」環境を豊かにできるかどうかである。このようなコンセンサスづくりを多様な親との間で試みる^{からだ}ことから、教師の学級づくりは始まる。

処方箋3は、親と教師双方の多様性を生かし合うこと。

教師より親が年長になる可能性を避け得ないなら、その条件を活かす親との関係を求めたほうが生産的。親にとって教師の若さは、自分たちが望む教師を育てる機会に転換可能。若い教師にとって年上の保護者は、一人前の教師に育ててくれる人生の先輩。親を学級づくりのパートナーにできる教師の明るい謙虚さと柔軟性の発揮が成功の秘訣である。課題は、教師への対抗ではなく、よりよい授業ができる条件を整えるために、親同士が互いの個性を活かし合う意義を、年長の管理職や親の先輩が伝える仕組みづくり。わが子の才能開花環境づくりを大義名分に、学校の常識とのズレを自覚する親をトラブル処理能力(人の間づくり)育成モデルにできるかどうか、成否の分かれ目になる。

見えない壁の前で

担任や学校との距離の取り方が わからない親たち

岐阜大学教授

有村久春

ありむらひひさる

いくつかの事例から考える

●ケース1

PTA役員のAさんは、近所に住むBさん(小学四年の母親)から相談を受けた。

——担任のK先生が、うちの子をいじめっ子に仕立てている。どうも納得できない。先日も個人面談で、「彼は悪気はないのでしょけれど、弱そうな子に命令したり無理に遊びに誘ったりするようです」と言われた。女の子のお母さんからも、乱暴な子とのうわさがあるとの話を聞いている。活発な子と思っていたが、そんなに悪い子なのか。心配しているが、どうやって先生に話したらよいか。

わが子の気になっているとき、先生にどうやって話してよいかわからないようだ。Aさんも「そうですね、ありのままに話してみても？」と言ったものの、Bさんの不可解な顔が気になっている。代わって、担任の先生と話してほしいということだろうか。

第一部 親と教師のこころの今

見えない壁の前で

変わってきた親事情

親の成長と
教師のこれから

第二部 親のこころ理解Q&A

こんな親にどう向き合えば
よいでしょうか

親のこころ・教師のこころ Q&A

揺らぐ、教育のこころ

いま、学校が置かれている状況

尾木直樹

親のこころがわからない——教師と親の思いのズレを活かす処方を
担任や学校との距離の取り方がわからない親たち
なぜ親と教師はわかり合えないのか
——存在論的不安が生む人間関係の随壁

馬居政幸
有村久春
土井隆義

「親都合」が優先する子育て
子育てに専念する高学歴母親の葛藤
なぜか子どもに関心が薄い親の出現
学校に対する怒りの拳がおろせない背景
「子どもが成長する力」を信頼できない親たち

官本まき子
水久ひさ子
杉山由美子
小野田正利
金盛浦子

学校は親の成長をどう支援していくか——親の成長と学校の成長
感情労働者としての教師のあり方
——その成長と自己回復の場をどこに求めるか

小林正幸
水井聖二

【学級経営】

Q1 クラスでお金の途難があつて/Q2 授業への鋭い批評/Q3 再度
席替えの要求/Q4 担任を替えてほしいと親が騒いでいる/Q5 「訴
訟します」/Q6 子どもと接する時間がとれない/Q7 「忙しそうで相
談もできない」/Q8 親の温度差

大数見仁
大橋重保
磯崎奈保子
有村久春
山上和子

【特別支援】

Q9 ろくに挨拶もしない親/Q10・11 「乱暴な子を転校させてほし
い」/乱暴な子の受け入れを拒否する親/Q12 「支援員をつけてほしい」
/Q13 帰国児童のA君/Q14 家では問題がないという親/Q15 ホー
ム・スクーリングをさせている親/Q16 「普通クラスで個別指導をして
ほしい」/Q17 「IQが高い子なので、普通学級で個別にレベルの高い授
業をしてほしい」

山上和子
大橋重保
中山哲志
弘田栄子
谷野敏子
水井聖二
小郷桃子

【ケータイ問題】

Q18 ケータイを持たせないという指示が通らない/Q19 ケータイ酒
けの親

松下一世

【不登校・ 行き渋り】

Q20 「登校刺激を加えないでほしい」/Q21 しょっちゅう遅刻の電話
をかけてくる親/Q22 体育を嫌がる子/Q23 仲間内での相談ばかり
で、学校はかやの外

金子直子
仲田洋子

【虐待・無関心】

Q24 赤ちゃんを世話させられている子/Q25 朝食抜きで登校する子
/Q26 子ども世話に関心の薄い親/Q27 親の生活が不規則で不登
校の子も

片桐力
谷野敏子

【通塾】

Q28 六つもの塾やお稽古に通う子ども/Q29 学校は余計なことを教
えないでほしいという親

小郷桃子
浦野裕司